

九州 Kyushu

野中園亭

Text=Kuniki Nonaka

オペラ舞台の地の利を生かした 「マダム・バタフライ」国際コンクールin長崎

地方の音楽活動の源泉は、地元のおーケストラ、音楽ホール、音楽大学の存在と大きくかわることになる。福岡市では唯一のプロ・オーケストラ、九州交響楽団と音楽ホールであるアクロス福岡シンフォニーホールの役割が大きくなる。

まずは、九州交響楽団の定期演奏会を振り返る。イギリスにちなんだ名曲、マラー没後100年記念、ロシア音楽の真

髓などのキャッチフレーズを掲げて、特色あるプログラムを組んでおり、企画に熱を入れて注目に値する。8回の定期演奏会のうち3回はミュージックアドヴァイサー／首席指揮者である秋山和慶が振り、残りは首席客演の小林研一郎と客演の指揮者たちの担当であった。その土地に在在する常任指揮者がいないのである。同楽団は最近まで

「メジャーへの挑戦」と銘打って秋山和慶の指揮でリヒャルト・シュトラウスに集中して取り組んでいたが、この「メジャーへの……」の意味合いは何だったのだろう。在京のオーケストラに追いつけと言う意味だったのだろうか。かつての九響の情熱が迸る演奏が相当消えたように筆者には感じる。個性が薄くなり、特色ある企画を形よくこなしている。11月に聴いたマラーの「交響曲第9番」の第1、4楽章に見せた緊張感のある濃密な表現は久しぶりの情熱を感じた。著名なオーケストラの生気のない地方公演を真似しないでもらいたい。

11月のパーヴォ・ヤルヴィ指揮パリ管弦楽団の演奏会（アクロス福岡）は久しぶりに充実した演奏を聴くことができた。シャキッとしたフランスのオーケストラの魅力が堪能することができた。これは音響の比較的よいアクロス福岡シンフォニーホールで聴いた感想であるが、九州にはこのところ音響よりは見ることに力を入れたホールが目立つ。2階の席の各段差を大きくとって、演奏者を見下ろすような形である。確かに、音楽を聴くよりも見るために来る人が増えたような気がする。そしてどのような演奏であろうと、ブラヴォーの声と盛大な拍手を贈るのである。考えさせられる問題である。

各県の音楽状況を見ると、自治体や財団などが主催する音楽祭が中心になっている傾向が見られる。霧島国際、

別府アルゲリッチ、宮崎国際など各県で繰り広げられているが、押しなべて中央や海外からの演奏家を呼んで何日かの日程を組むパターンであり、プログラムの工夫はあるものの似ているし、地元演奏家（あるいは出身者）を重用していない点が気にかかる。九州地方の音楽の核であるべき九州交響楽団が登場しないのも同様だ。この点で興味を引いたのは、長崎市の「マダム・バタフライ国際コンクールin長崎」である。ブッチーニのオペラ「マダム・バタフライ」の舞台になったという地の利を生かしての企画で、個性的なイヴェントだと感じた。伴奏するオーケストラも地元勢で組織している点を買う。

檜垣智也がアコースモニウムによる電子音響音楽のためのコンサート（9月・アクロス福岡円形ホール）はユニークな試みであった。福岡市で電子音楽をも手がけた先駆者今史朗（1904（77））が復活演奏された意義は大きい。

九州大学が創立100周年に際し、明治42年創立の九大フィルハーモニー・オーケストラが、日本人初演を果たしたベートーヴェンの《第九》を記念演奏した。

景気低迷の折、経費のかかる企画が敬遠される傾向は九州でも例外ではない。だが、そんな時こそアイデアの勝負であり、地元音楽家の真剣勝負を生かすチャンスと考えるべきであろう。同時に有名演奏家ばかりに憧れる聴衆の啓蒙も必要になってくる。